

「すごい壮大なタイトル。あんたたち自らハードル上げたわね」といやみなのか褒め言葉なのかわからないことを言っていた。親なら子どもが一生懸命仕上げた宿題を褒めるのがふつうではないのだろうか。いいや、だって、これが私のお母さんなのだ。ふつうとはほど遠くても、これが私のお母さん。おじいちゃんとお母さんのいびつな親子関係を間近で見えてきて、私にはわかったことがある。

親子の数だけ違うパターン、かたちがあるんだ。

さて、そんなうちのお母さん、最近なんと『けやき』で働くようになった。

「あは！ ちよつと、ユナ、これ見てえ！」

寝る前、お母さんが嬉しそうな顔でスマホを見せてきた。

「この食レポサイトに『けやき』が載ってる！ しかも、これ読んで。『おいしいし、最近、若くてきれいな店員さんが入って活気づいた』って、あたしのことじゃない？」

「うわ、そうやって自分のこと検索するのエゴサーチっていうんだよ。お母さん、それ自分で書いたんじゃない？」

『けやき』で働くようになったといっても、今まで通りコンビニのバイトも続けているし、お母さんのことだから、おじいちゃんとケンカしたら、すぐに「やーめた」って言うかもしれない。だけど、この前、おじいちゃんが体調をくずしたこと、お母さんなりに気づかっているんだと思う。

「もう眠い。電気消していいでしょ？」

私が言うと、お母さんはしぶしぶスマホをいじるのをやめた。

「おやすみ」

こうやって布団を並べて同じ部屋で寝るのも、もう少しでおしまいだ。あかずの間を片付けて私の部屋にする作業は着々と進んでいる。子ども時代のお母さんの残がいもだぶ捨ててしまった。

ふしぎなことがある。

お母さんの残がいを捨ててから、あのちゃんが現れなくなった。

薄々感じてはいた。あのちゃんは、お母さんにそっくりだ。もしかしたら、あのちゃんはお母さんのユーレイなんじゃないかって。でも、ユーレイってこの世にいないひとだよな。

隣をちらつと見ると、お母さんがくーくーと規則正しい寝息をたてていた。お母さんは生きている。元氣いっぱいだ。だから、このことを考えると結論はきまつてこうなる。私、疲れてるんだな。

そう、十二歳だって疲れるのだ。家では家族のこと、学校では友だちや先生のこと。それに、まだまだ続きそうな未来のこと。色々考えているから。

「お祭りに行かない？」